

動物由来感染症

(身近なペットからの感染症)

佐賀県獣医師会 会長

御厨猛男 先生

佐賀大学医学部国際医療学講座 臨床感染症学分野 教授
佐賀大学医学部附属病院感染制御部 部長

青木洋介 先生

お二人にご執筆いただきました



犬や猫などのペットを飼うときは、ペットの健康状態に気を付けましょう。また、今回お知らせしたような身体の異常を感じたら、早めに医療機関を受診しましょう。ペットの飼育で困ったときは、近くの動物病院に相談しましょう。

犬や猫から

いぬかいちゅう

ねこかいちゅう

犬回虫、猫回虫

犬回虫や猫回虫の幼虫がヒトに感染し、ヒトの体内で移行して、病気を起こすものです。

犬回虫は犬の寄生虫で、母犬から仔犬へ胎盤や乳汁により感染するため、母犬が犬回虫を持っていれば、仔犬は生まれながら、犬回虫を持っています。

特に幼児への感染に注意が必要です。

犬や猫の糞を処理する場合は、手袋をして処理しましょう。

砂遊び場などは、犬や猫の糞に注意しましょう。

飼い犬や飼い猫には、犬回虫や猫回虫によく効く駆虫薬がありますので、動物病院にご相談ください。

なお、糞便を介する回虫症とは別に、犬や猫から噛まれた場合も、時に注意が必要です。

犬と猫の口の中にいる細菌は同じ種類のもが多いですが、犬の噛み傷に比べて目立たない、猫による小さな噛み傷の方が重症化する場合があります。猫の牙は細く尖っているため、手の甲などを噛まれると、牙が手根骨と呼ばれる小さな骨の間の深くまで刺さり、そこで細菌が悪さをすると、骨髓炎と呼ばれる重症の感染症を起こすからです。犬の噛み傷は、見た目は派手ですが、広く浅い傷も多く（もちろんこの限りではありません）、このような場合は表面の傷のみで治ることが期待されます。犬や猫に噛まれたら、早目に医療機関を受診することをお薦めします。

犬から

きょうけんびょう

狂犬病

動物からヒトに感染する病気で一番怖いウイルスの病気です。現在、有効な治療方法はありませぬ。

哺乳類の動物が感染します。特に犬が感染しやすいので、この病名が付けられました。

毎年、世界では3〜4万人が死亡しています。日本では近年、犬での発生はありませんが、台湾では野生動物で発生しています。

ヒトへの感染を防ぐためには、飼い犬への予防注射が重要となります。予防注射の免疫は1年しか効きませぬ。

飼い犬へは、年1回の予防注射を必ず受けさせましょう。

東南アジア等の開発途上国においては、犬への狂犬病ワクチンの接種率が高くありません。従って、開発途上国では不用意に犬に近付く、あるいは頭を撫でるなど、犬に噛まれる可能性のある行為は避けてください。噛まれた場合に、狂犬病に罹患するリスクが日本よりは明らかに高いためです。

どの国に渡航する時に狂犬病ワクチンが必要かについては、佐賀大学医学部附属病院（感染制御部）あるいは福岡検疫所に電話でお尋ねください。

なお、海外渡航のためのワクチンには、渡航の半年以上前に接種することが必要なものもあります。従って、旅行計画が立った時点なるべく早く、接種が薦められるワクチンの種類などについて問い合わせる頂く方が良いでしょう（最低でも一ヶ月前に！）。



猫から 猫ひっかき病

猫に引っかけられた時、傷口から細菌が入り、傷口やリンパ節が腫れる病気です。

日本の猫の9〜15%が原因菌を持っていると言われています。

猫に対しては、病原性はありませんので、感染した猫には症状はありません。

猫の爪を切り、ペットの衛生状態を保ちましょう。

猫から外傷を受けた時は、傷口を消毒しましょう。

子猫を飼っている場合に、わずかながら猫ひっかき病に罹患するリスクが高いと言われています。これは子猫が沢山の病原菌を持っていると言っており、子猫の方がヒトにじゃれついて引っかけることが多いため、と考えられています。

手の甲を引っかけられた場合、数日後に腋の下のリンパ節が腫れるようなことがあれば、直ちに医療機関を受診してください。放置しておく、

この感染症の影響が目にも及ぶこともあります。なお、リンパ節はゴルフボール程度の大きさにまで腫れることも珍しくありません。



猫から トキソプラズマ症

トキソプラズマ原虫が原因です。この原虫は多くの哺乳類の動物が持っていますが、ペットでは猫が感染源となります。

妊娠した女性が妊娠初期に感染すると流産する場合があります、中期に感染すると胎児に感染し、眼疾患や神経・運動障害を起す場合があります。

特に感染している子猫の糞便中に原虫が排泄されると、数日後には感染しやすい型になり、ほこりなどと一緒に経口的に感染することもあります。妊娠した女性は、猫の糞の取扱いに注意しましょう。

また、トキソプラズマに感染している肉を生で、あるいは十分な加熱のまま摂取することも感染リスクとなります。具体的には、ユッケ、馬刺し、鶏刺し、生ハム、サラミがありますが、生乳なども時に感染源となります。また、これらの食材を扱った包丁やまな板を介して、トキソプラズマが生野菜などの食品に伝播されることもあります。生ものを扱う度に、包丁やまな板を熱いお湯で洗い流すことは、感染のリスクを下げられると思われるます。

なお、トキソプラズマはインフルエンザのように飛沫感染など、ヒトからヒトへの感染はありません。

小鳥から オウム病

オウム病クラミジアが病原体で、クラミジアは細菌とウイルスの中間に分類されます。

多くの鳥類より感染します。2週間程度の潜伏期のうち、インフルエンザ様の症状が現れます。高齢者では重症例がみられ、肺炎などを併発します。

鳥の乾燥した糞を吸入したり、ヒトと鳥とが餌の口移しをしたりする時に感染します。

オウム病は多くの場合、高熱、咳、息切れなどを認め、頭痛や筋肉痛などの全身症状を呈することもあります。医療機関を受診した場合は、ご自分が鳥(具体的な種類)を飼育していることを、医師に伝えてください。飼っていたインコやオウムなどが最近死んでしまったような場合は尚更です。オウム病に罹患しても、テトラサイクリンという抗生物質の治療により、一般には順調な回復が期待できます。



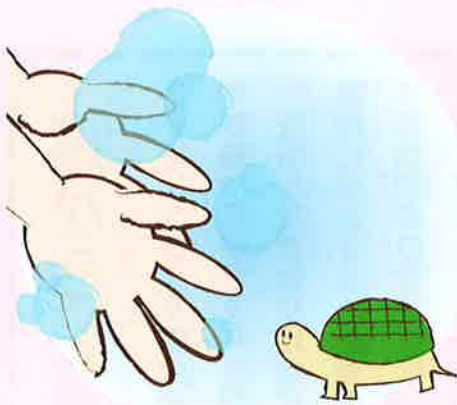
亀から サルモネラ症

急性の胃腸炎症状(発熱、下痢、腹痛)を伴った食中毒の原因菌で、亀の腸内にいるサルモネラ菌が、糞や尿と一緒に排泄され、ヒトが亀にふれた時や水槽の水から感染します。

このような感染経路を「糞口感染」と言います。

亀以外にも、種々の環境中にサルモネラ菌は生息しています。いずれもカメ等の動物、あるいはヒトからの排泄物が手指に付着し、それが自分では気付かないうちに、口に直接ふれることで、腸管にサルモネラ菌が入ってきます。

感染を防止するためにも、食事前には必ず手を洗う習慣を付けておくことが大切です。



ペットからの感染症の予防のしかた

- ・ 過剰なふれあい(細菌やウイルスなどは動物の口や爪の中にある場合があるので、口移しで餌をあげるなど)をしないようにしましょう。
- ・ ペットの飼育環境を清潔に保つようにしましょう。
- ・ 糞尿は速やかに、適切に処理しましょう。
- ・ ペットにふれたら、手を洗いましょう。